

国語国文学会だより



No. 40

2009. 4

日本文学科卒業生の会

国語国文学会

平成二十年度秋季大会

研究発表・公開講演会 報告

平成二十年度秋季大会を十一月二十九日（土）、八十年館八五一教室にて開催しました。

◆午前の部（研究発表） 十時～十二時

・南台科技大学における日本語教育実習報告

〔中級授業での「アンケート調査」活動の実施とその効果〕

・本学博士課程前期一年次

横田亜朱紗氏

・本学学部三年次

大川智子氏

・「闇桜」——「花」レトリックからの逸脱——

・本学非常勤講師

橋本のぞみ氏

・家集に残る中宮嬪子の文化圏

・明星大学非常勤講師

高橋由記氏

◆午後の部（講演・対談） 十三時三十分～十六時三十分

・「おとこ」と「乎とこ」——藤原定家の仮名遣い——

・本学教授

坂本清恵氏

・対談 大石静氏に聞く「作品とその時代」

・脚本家・作家

大石静氏

（聞き手）本学教授

高野晴代氏

懇親会 十六時四十五分～十八時十五分

於 七十年館生協食堂

講演要旨

「おとこ」と「乎とこ」——藤原定家の仮名遣い——

本学教授 坂本清恵

藤原定家の仮名の使用について、定家の著作である『僻案抄』の仮名遣いを調べてみてわかったことがらをお話ししました。

定家の仮名遣いにはひとつ、説明がしにくい大きな問題があります。それは、数ある定家書写本の中でも、紀貫之自筆本を書写した『土左日記』の冒頭に、定家仮名遣いの異例が出てくることです。定家の自筆書写本（前田育徳会尊経閣文庫蔵本）では、貫之自筆本を校訂しているにもかかわらず、冒頭の「乎とこ」が、定家が行っていた仮名遣いとは合致しないのです。なお、へは平仮名の字母を示します。

定家は、鎌倉時代に入るところには発音が合流していたア行の「お」とワ行の「を」を、声（現代でいうアクセント）によって、それぞれ平声（L/低いアクセント）であれば「お」、上声（H/高いアクセント）であれば「を」のように書き分けていました。その凡例のような書物として、『下官集』も著しています。定家系統の写本かどうかは、歴史的仮名遣いと、アクセントによる定家仮名遣いとで表記に相違が現われる、「音」「折る」「惜しむ」が、どのように書き表されているかで、ある程度の見当がつけます。これらの語がもし「をと」「おる」「おしむ」と書かれていれば、定家仮名遣いによる写本と考えるとほぼ間違いありません。問題の「男」は、定家の時代には「平平平（LLL）」のアクセントであり、定家自

筆本類には「おとこ」と書かれています。

定家は、文暦二年（一二三五）五月十三日、七十四歳のときに、蓮華王院に蔵されていた貫之自筆の『土左日記』を二日かけて書写しました。成立から三〇一年経ったその時にも、「紙不朽損其字又鮮明也」であつたと記しています（尊経閣文庫蔵本奥書）。小松英雄氏は問題の冒頭の「（平）とこ」について、定家の校訂した他のテキストには「（平）」は使用されていないことから、貫之自筆原本の姿を彷彿とさせるため踏襲したと推定しています。

しかし、よく調べてみますと、『土左日記』書写以前にも「（平）」を使つた例が見られます。定家自筆の天福二年本『後撰和歌集』一三三ウ8行目の「さ（平）しかの」の例で、行頭に並んでしまう「さ」をしかの」を、書き換えるために用いられたと考えられます。

「佐遠之可」のつまなきこひを」 1056

「左平志可」の聲高砂に」 1057

この例は「お」ではなく、「を」として使っており、『土左日記』の場合と異なります。

今回、調査分析した『僻案抄』は、定家の三代集（『古今集』『後撰集』『拾遺集』）についての注釈であり、『土左日記』の書写以降に執筆されたものです。一類本の東山御文庫本『案僻』は、後水尾院の御所にあつた定家自筆本を、照高院道見法親王が一部分を自身で写し、残りを童幼に書写させたものです。双鉤填墨によって、その字母に及ぶまで忠実に写されていることがわかります。定家自筆本は、万治四

（二六六）年の火災で焼失したため、寛文元年五

月下旬にこの臨模本が献上されています。定家自筆本ではないことから、これまで該当資料の仮名遣いについては、省みられてこなかったのです。

東山御文庫本では、「お」と「を」はアクセントによる定家仮名遣いで書き分けられています。が、「お」で書かれるべき七語に「（平）」りつる（折）「（平）」つる（落）など「（平）」の例が見えます。これは、貫之自筆本『土左日記』冒頭の「（平）とこ」の表記に触発されて、「（平）」の仮名を「お」の代替の仮名として使い始めたことを示しているのではないかと、私は考えるのです。その裏づけとして、次のことが考えられます。

まず、「を」には「（越）（平）」など複数の異体仮名がありました。が、「お」には他に異体仮名がありませんでした。定家自筆本には、「（越）」を「お」と「を」の両方の書き換えの仮名として使用した例が見られます。定家自身、「（平）」をあまり使つてこなかったことから、『土左日記』冒頭で「おとこ」で表記するところから、「（平）とこ」の表記を見、「お」の書き換え用の仮名文字として「（平）」を意識したのではないかと、いうことです。

また、『僻案抄』には、

貫之日記にかくてさし（河尻よりのほる他）のほるに東の方に山のよこほれるをみて人にとへはやはたの宮といふ古今撰者山のよこほれるをみてとかけけるよこほりふせるといふ哥にかなふへくや（東山本三十九ウ・四十オ）

のように『土左日記』本文を引用したり、物かきうつすとあらぬ僻文字ともかきける物

のことやうの手なる草子を貫之か自筆といひて人すかしける物をもてなしていひいてたるいたつら事也その本貫之か手にあらず（東山本六ウ・七オ）

と「貫之が自筆」「貫之か手にあらず」など、定家自身が貫之自筆本であるかどうかを判断できることを述べたりしています。

さらに、東山本だけではなく、定家自筆本を臨模した二類本の鷹司本でも同様に、「お」の書き換えとしての「（平）」が用いられていました。

以上の三点から『古今集』の撰者である紀貫之自筆本『土左日記』を書写したことが、定家晩年の仮名の用法に大きな影響を与え、その一部を変化させたと考えられるのです。

対談 大石静氏に聞く

「作品とその時代」出席者感想

大石作品の目指すもの

「作品とその時代」をめぐる一

本学教授 高野 晴代

今回、聞きたかったことの一つに、たとえば『功名が辻』で千代と一豊を描く時、よりわかりやすくするために、状況を現代に似させる、いわば現代のホームドラマ仕立てにさせるかという点がありました。それについて、城主を最高位にしてピラミッド型に家来が配されている組織を、社長が筆頭の会社組織に類似させて描くことは、理解しやすいように思えるけれども、むしろその時代に懸命に生きた人々をそのまま描くことこそ、一番わかりやすいし、

それが、今を生きている人々の生き方におのずと通じているのではないかしらと答えてくれました。ただテレビドラマを作ることは、一人ではできない、力を合わせる制作の現場では、たとえ脚本家であっても、様々な制約を受けつつ、書いているのだと今回聞き、さらに何といつても、視聴率には拘らなければならぬとのこと。この状況でも、大石作品には、その時代に生きる人々への執着、いえ愛とも言える強さがある、それが個性を持った作品に仕上げる原動力になっているのではないかと推察しました。

『功名が辻』に成宮寛貴扮する豊臣秀次が、千代に『源氏物語』の写本を贈る場面があります。千代を大事な人と思う秀次の心を、『源氏物語』という作品に象徴してくれた放映の日に私は大石さんにメールしました。私のことも思い出しつつ書いた……という言葉に感激すると同時に、秀次がかなりの教養人であったこと、『源氏物語』を愛読したことなどを徹底的に調べ、書き上げた経緯を聞きました。ここでも、その時代の在り方から多大な影響を受けつつ生きる人々が鮮やかに浮き彫りにされ、その心情が今の私たちに生き生きと伝わってきています。またコマ劇場の最後の公演となった昨年十二月の『愛と青春の宝塚』は、第二次世界大戦下、戦争に翻弄される人々の姿を緻密に描き、戦争の惨さ、悲しさを、『宝塚』の美しい歌々を背景として訴える素晴らしい作品に仕上がっていました。

大石作品の魅力は、その時代において、社会を見つめる鋭い眼に基づいて書かれているからと、今回

聞き手を務め、はつきりと知ることができたと思います。

大石静氏、高野晴代教授の対談から得たもの

本学博士課程後期三年次 森田 直美

秋季大会の日、私は意気揚々と家を出た。今を時めく脚本家・大石静氏と、私の指導教官・高野晴代先生の対談を、前々から楽しみにしていたのだ。お二人は中学時代からの同窓で、現在も、折につけ連絡を取合う仲良しとのこと。こんな「友情対談」は、なかなか聞けるものではない。会場は学生・卒業生で一杯。期待高まる中で、対談はスタートした。

旧知のお二人の軽妙な掛け合いによって、対談は快調に進み、会場も大いに沸いた。大石氏が脚本家となるまでの経緯、作家としてのあり方、作品への思い、そして高野先生との友情について。笑い、聞き入り、講演時間は瞬く間に過ぎた。

この日、特に心に残ったのは、この言葉だ。「小説がうまく書けないが、どうしたら書けるでしょう」という、学生の質問に対する、大石氏の答え。

「誰でも上手くない時は苦しい。それでも書くこう、書きたいと思えないならやめた方がいい」。

普段、院生として、少しでも良い論文を書く事を目指している私にとって、沁みる言葉だった。私たちが駆け出しは、書き詰まった時、自信が持てない時、それでも、原稿と向かい合い、自分で解決するしかない。大石氏のように、第一線で活躍されている方でも、同じように苦しんで、それでも「書こう、書きたい」という気持ちで乗り越えている。その事に

深く共感し、また、励まされた。

おそらく、会場にいた多くの人が、私と同じく、お二人からパワーを得て帰路についたのではないだろうか。対談終了後、会場を包んだ大きく温かい拍手が、「良い時間を過ごせた」という、皆の充実感を象徴していた。

「強い力」をいただいて

関根 緑（44回）

学生の切なる希望と同窓のよしみをもって快く講演して下さった大石静先生。本学教授の高野先生と同期の桜、まさに花のごときお二人の対談で、お話を聞くことができた。

先生の作品「四つの嘘」に見られる人間の生き方、私達世代の多くの者が思いもしない、いや考えることさえできなかった思考の世界、思考の自由な世界に警鐘をならし指針を与えて下さった。これまでの繰り返しにすぎなかった多くの人々の生き方、さらに女の生活が浮きぼりにされる。先生の描くその新しい生きざまは、常識を破り倫理に悖るものとも解釈される。しかし、常識とは何か、倫理とは一体何なのか、それはしよせん人間の作ったものに過ぎない。因襲に支配されない自由があつてこそ、本当の意味での自分が存在するのだと思われる。

ところで、日本の小説には思想がないと言われて



対談される大石静氏(右)と高野晴代教授(左)

いる。だが思想とは何も難しい事ではあるまい。平易に云つて個の自己主張と解釈してみよう。先生のお話を拝聴しながら、何とこれまで多くの人が殻の中でもがき苦しみ、じつと耐えて生きてきたかと慙愧の念しきりであった。先生は長い間の因襲からぬけ出る勇氣と眞の生き方をお話され、みなを力づけてくださった。私達は先生からその「強い力」をいただいたのである。自分らしく生きる、そう心にきめた、ひとときであつた。

大石作品の魅力

黒川 晴美 (新33回)

本学出身の人氣脚本家大石静氏を迎えての講演会は、中学校からの同級生である高野晴代教授を聞き手に開催された。眼前に着席された氏のにこやかな表情に親しみを感じながらも、時には観る者が直視を避けてきた己の内面を暴き出されるような作品を紡ぎ出す、その觀察眼に一瞬でもさらされるのかと思うと、自意識過剰な緊張も覚えた。

対談は、大河ドラマ「功名が辻」の中で豊臣秀次が千代に渡した源氏物語は何本であつたのか?との問い掛けから始まつた。まさに国文学科ならではの。そしてこの場にいる者皆が、大切な人への贈り物にこの上無い品物としてそれが描かれている事に共感できるのを、落ちこぼれ卒業生ながら、うれしく感じた。

多くの自作について、役者や演技により脚本が活きる場面を見る喜び、ドラマ界の現状等々が、途切れる間無く語られた。さらりとした口調の奥深くに

は、名だたる作家達の定宿に育ち、彼らの日常を目にして知つた世界がある。善と惡の心を併せ持つ人間の立体性を書く、との思いはここから生まれる。

既成の価値観や常識を疑い、自分が傷つく事を恐れて生きるのとはつまらないと言ひ切る氏の作品が変わらぬ人氣を得ているのは、どの時代を描いていても今の自分がそこに生きていると受け止められるからであらう。大石作品の魅力の本質はそこにあると得心した。

〈報告〉 文学散歩

永井 幸子 (新1回)

今回は太宰治没後六〇年に因み、ゆかりの多い三鷹周辺を訪ねる。十月十八日(土)晴、汗ばむ程の天候に恵まれ、午前十時三鷹駅を出発。(1)「太宰治文学サロン」 駅南口から徒歩三分。今年三月に開館したばかりで、『人間失格』の直筆原稿の複製や、著作本が展示されている。三鷹時代の生活を伝える写真・地図・年譜などのパネルやビデオによる解説を見て、太宰の生きた時代の雰囲気に触れる。「サロン」からは先のボランティアの方が案内してくれ

た。(2)「風の散歩道」 文学サロンを出て程なく、玉川上水通りへ出る。通常「風の散歩道」と呼ばれ、桜・樺の美しい道が三鷹駅から八百米程続く。現在の玉川上水は流れがあるか無きかであるが、当時は堰があつて、水量も多かったとのこと。人喰い川と呼ばれ、底がすり鉢状になつていて、落ちたら這い上がれなかったと言われる。上水道を歩くこと数分

にして、植込みに赤褐色の岩が置かれていた。青森特産の「玉鹿石」と刻まれ、ここが入水場所とわかる。昭和二十三年六月十三日夜更け、山崎富栄と入水。遺体は同十九日に発見され、駅近くの富栄の下宿先で検死された由。ガイドさんから二人がしつかりと結ばれている写真を見せていただく。次の太宰の居宅跡への途中、西洋建築のモダンな「山本有三記念館」と庭園に立ち寄る。(3)「太宰の居宅跡と井心亭」 居宅は終戦前後を除き、入水の日までに十年近く居住したが、現在に残っていない。この間の井心亭は市の和風施設であるが、道路に面した所に、太宰の旧宅から移植した百日紅があり、垣根越しに見ることができた。(4)「禅林寺」 本堂の裏側に「森林太郎墓」と彫つた墓と向い合つて太宰の墓がある。その死から一年後に、太宰が尊敬した鶴外と向き合うように作られたとのこと。毎年六月十九日の桜桃忌には、全国から多くの人が訪れるとか。以上予定の地を巡ると、午後一時半を廻つていたが、駅近くの釜飯屋での食事は、心地よい疲れを癒し、空腹を満たしてくれた。南部鉄釜でふつくらと炊き上げた御飯の後、こそげ取つてくれたおコゲを、ダシの利いたお茶漬けで頂いた味は忘れ難い。

二〇〇九年四月三十日

発行・日本女子大学日本文学科

国語国文学会卒業生の会

〒一一二八六八一東京都文京区目白台二一八一

日本女子大学 日本文学科内